

## 4. 金与正・朝鮮労働党第1副部長の談話



米国で大統領選前の米朝首脳会談があるのではないかとの憶測が出たことを受けて、金与正が談話を発表し、その可能性を否定。米国の敵視政策が続く限り交渉のテーブルに着くつもりはないというDPRKの立場を明確に示した。また制裁解除を求めていたハノイ会談と現在の立場の違いについても説明した。

### ◆ 金与正・朝鮮労働党第1副部長の談話(抜粋) ◆

朝鮮中央通信 2020年7月10日

(略)

どこまでも私個人の考えではあるが、朝米首脳会談のようなことが今年行われるということはある得ないと思う。(略)

私は、朝米間の激烈な対立と解決できない意見の相違が存在する状態で、米国の決定的な立場変化がない限り、年内もそれ以降も朝米首脳会談は不要であり、最小限我々には無益であると考え。(略)

最近になって米国が朝米間の実務協議や首脳会談のテーブルを叩く秘められた動機を正しく見抜かなければならない。

米国は、対話のドアを開けておいて我々を落ち着かせ、安全な時間を稼ぐことを願っている。

そして、米国は心のうちではハノイでのような交渉条件にでも戻りたいのかも知れないという気がする。

今になって顧みれば、まさにその2019年の年頭、米国はハノイで部分的な制裁解除をするような真似をして、いくらでも我々の核中樞を優先的に麻痺させ、我々の長期的な核計画を失敗させることのできる可能性を持っていた。

その頃は、我々が取引条件が合わないにもかかわらず、危険を冒してでも制裁の鎖を断ち切って、一日も早くわが人民の生活向上を図ってみようと一大冒険をしていた時期であったと言える。

しかし、2019年6月30日、板門店で朝米首脳会談が開催された時、北朝鮮の明るい経済展望と経済的支援を説教し、前提条件として追加的な非核化措置を求める米大統領に対して、わが委員長同志は、華麗な変身と急速な経済繁栄の夢をかなうために、我々の体制と人民の安全と未来を何の保証もない制裁解除などと決して交換しないという立場を説明した。さらに委員長同志は、米国が我々に強要してきた苦痛は米国に対する憎悪に変わり、その憎悪が我々を駆り立て、米国主導のしつこい制裁封鎖を切り抜け、我々自身の力で我々の方式で生きていくよう導くであろうことを明確に示した。

それ以来、我々は制裁解除問題を米国との交渉議題から完全に除外した。

私は、「非核化措置対制裁解除」というこれまでの朝米交渉の基本テーマが今や、「敵視撤回対朝米交渉再開」の枠組みに改めるべきだと考える。(略)

最近、米国が対朝鮮制裁に関する大統領行政命令を1年間延長する一方、朝米関係の改善に先だって「人権問題」が「解決」されるべきだと喧伝して我々の「人権状況」に言い掛かりをつけたり、わが国を「最悪の人身売買国家」「テロ支援国」に再指定するなど、我々を狙ってことごとくに刺激したりしているが、これだけを見ても米国の対朝鮮敵視が決して撤回されないということがよく分かる。(略)

我々は米国からの長期的な脅威を管理し、そのような脅威を抑止し、そのような中で我々の国益と自主権を守り抜くための長期的な計画を立てなければならず、実際の能力を強固にし不断に発展させていかなければならない。(略)

米国は我々の核を奪おうと頭を絞るのではなく、我々の核が自分らに脅威にならないようにすることに考えを巡らしてみの方がより簡単で有益であろう。我々には米国を威嚇する考えが全くなく、それについては委員長同志もトランプ大統領に明白な立場を明らかにしている。(略)

我々は決して、非核化をしないということではなく、今はできないということをはっきりさせておき、朝鮮半島の非核化を実現するには我々の行動と並行して相手側の多くの変化、すなわち不可逆的な重大措置が同時に取られてこそ可能であることを米国に想起させる。

相手側の多くの変化という時、制裁解除を念頭に置いたものでないことを確かにしておきたい。(略)

出典：『朝鮮中央通信』2020年7月10日

以下のURLから日付により検索。<http://www.kcna.co.jp/index-e.htm>

翻訳は朝鮮中央通信日本語版サイトを基に作成

<http://kcna.kp/kcna.user.home.retrieveHomeInfoList.kcmsf>

アクセス日：2021年4月1日